



Title	パンジャーブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (I)
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 1, p. 167-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79462
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

The Anjuman-e Panjab and its Efforts to Reform Urdu Poetry (I)

MATSUMURA Takamitsu

Society for the Diffusion of Useful Knowledge in the Panjab, generally known as the Anjuman-e Panjab, is one of the famous reformist organizations which led the enlightenment movement in the Panjab. It was founded in Lahore on 21 January, 1865. Dr. G. W. Leitner, an orientalist and principal of the Government College, Lahore was the president of the Anjuman and he energetically endeavoured to lift up the cultural and educational standard of the Panjab.

The Anjuman-e Panjab wanted to spread useful knowledge through Indian languages and it also wanted to revive Oriental learning and classical Oriental languages such as Arabic, Persian and Sanskrit. Fortunately, Donald McLeod, the Lieutenant-Governor of the Panjab, supported the activities of the Anjuman.

One of the most important reformist proposals that Dr. Leitner made was that of "Oriental University." Dr. Leitner was a strenuous opponent of the educational system enforced by Calcutta University, which strongly advocated English education in India.

Dr. Leitner believed that English education system was not adequate to the Indian people and that the vernacular languages should be a means of education and of examinations. He found many problems in the educational situation in the Panjab, and "Oriental University" was his answer. The name of "Oriental University" is undoubtedly a misleading one. In fact, some people misunderstood its real objectives. Dr. Leitner not only wanted to revive Oriental classics but also he wanted to spread Western useful knowledge through Indian languages.

In 1865, Dr. Leitner launched the "Oriental University" Movement, which was soon approved and supported by the local people and the Government of the Panjab.

In 1869, the Central Government of India granted the petition at last, but it did not allow to establish a new university. The Central Government of India only admitted to establish a university college in Lahore. This university college was named Lahore University College and, later, it was renamed Panjab University College.

A few years later, on 19 April, 1874, the historic meeting was held in the building of

the Anjuman-e Panjab, in which Muhammad Husain Azad read his famous manifesto and appealed to initiate a new kind of Urdu poetry. Azad also read his *mathnavi* poem “Shab-e Qadr.” (The Night of Qadr)

W. R. M. Holroyd, Director of Public Instruction, Panjab, made a speech and proposed to hold a new kind of *musha'iras* (poetical symposium) every month in order to develop new Urdu poetry.

The *musha'iras* were held nine times and lasted nearly a year. The last *musha'ira* was held on 13 March, 1875. Azad was a leading figure in the *musha'iras* and took part in it every time. Altaf Husain Hali, who worked for the Panjab Government Book Depot at that time, also appeared in four of the *musha'iras* and read his *mathnavis*.

No one can deny the fact that this movement for new Urdu poetry played a very significant role in the history of Urdu poetry. However, strangely enough, there are no satisfying books and papers on this movement. This is the reason this paper was written.

This paper, however, does not seek to discover new facts and to revise the history of this movement. It is very difficult, or rather impossible to do these things in Japan. Therefore, in this paper, efforts have been made to survey the historical background and the historical process of this movement as critically as possible and to point out some issues to be solved in the future.

This is the first chapter of the paper and it is subdivided into three sections.

The contents are as follows:

Chapter 1. Historical Background

- (1) The Anjuman-e Panjab
- (2) The “Oriental University” Movement
- (3) The *Musha'iras* of 1874

パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (I)

松 村 耕 光

はじめに

ウルドゥー近代詩の確立を目指す最初の試みが行なわれたのは、ラホールの社会啓蒙組織、パンジャブ協会 (Anjuman-e Panjāb) に於いてであったと言われている。1874年4月19日¹⁾、このパンジャブ協会で、ウルドゥー詩改革のための講演会が開かれ、席上、当時、ガヴァメント・カレッジのアラビア語教官であったムハンマド・フサイン・アーザード (Muḥammad Ḥusain Azād 1830-1910) が、ウルドゥー詩の改革を訴える講演を行ない、そしてその講演の後、自作のマスナヴィー詩「偉大なる夜」(Shab-e qadr) を朗読、実例を以て新しい詩の姿を示したのであった²⁾。この講演会で、ウルドゥー語で新しい内容の詩を発展させるため、パンジャブ協会で毎月、詩会を開くことが決められ、翌年3月まで、全部で9回、ほぼ毎月1回開かれたが、この詩会は、従来の詩会とは全く異なった形式のものであった。即ち、従来の詩会では、ガザルの規定の半句 (miṣra‘-e ṭarḥ) が与えられ³⁾、それに基づいて各人がガザルを作って持ち寄るのが一般的であったが、このパンジャブ協会の詩会では、詩の題目が与えられ、マスナヴィー詩型で詩作するようになっていた。ガザルは恋愛を中心とした主題のみを扱うようになっており、時代に合わなくなっている、というのがアーザードの考えであり、そのため、様々な主題を、詩の形式にそれ程束縛されることなく、連続的に歌うことの出来るマスナヴィー詩型が採用されたものと推測される。

この詩会の開催日時と詩の題目は、以下の通りであった。

- 1) 1874年5月30日「雨季」(barsāt)
- 2) 6月30日「冬」(zamistān)
- 3) 8月3日「希望」(ummīd)
- 4) 9月1日⁴⁾「郷土愛」(ḥubb-e waṭan)
- 5) 10月⁵⁾「平和」(amn)
- 6) 11月14日「正義」(inṣāf)
- 7) 12月19日「美德」(murawwat)
- 8) 1875年1月30日「満足」(qanā‘at)
- 9) 3月13日「文明」(tahdhīb)

これらの詩会の全てにアーザードは参加し、新しい詩の方向づけを行なおうと試みた。また、当

時、ラホールの州政府出版局で働いていたアルターフ・フサイン・ハーリー（Alṭāf Ḥusain Ḥālī 1837-1914）も、1), 3), 4), 6) の詩会に参加している。この頃のハーリーはまだ無名であったが、この詩会を通じて名声を高めてゆき、遂には、ウルドゥー近代詩の代表的詩人となる。この点からも、このパンジャブ協会の詩会には意義深いものがあったと言わねばならない。

本論文に於いては、ウルドゥー近代文学史上きわめて重要なこのパンジャブ協会の詩会について、この詩会の中心人物であったアーザードの活動と文芸思想、そしてその詩を中心としながら、考察してみたいと思う。

第1章 歴史的背景

（1）パンジャブ協会

パンジャブ協会がラホールの、児童教育の改善を目指していた組織「教育会議」（Shikshā Sabhā）の建物で設立されたのは、1865年1月21日のことであった。パンジャブ協会というのは通称で、正式名は、英語では、Society for the Diffusion of Useful Knowledge in the Punjab であり、ウルドゥー語では、Anjuman-e i shā‘at-e maṭālib-e mufīdah Panjāb という長いものであった。それで普通、パンジャブ協会（Anjuman-e Panjāb）という略称が用いられた。パンジャブ協会の設立趣旨は、この協会の正式名称からも察せられるように、啓蒙教育活動によってパンジャブを発展させようというものであった。

1月21日の会合で議長を務めたパンディット・マン・プール（Pandit Man Phūl）は、次のように演説している。

「皆さん！ 私達は数年来、こう思ってきました—カルカッタやラックナウーなどのように、パンジャブの州都であるこの町にも、パンジャブにとって有益な事の調査と学芸の発展が、著作物及び講演によって図られ、印刷によって普及されるような、土地の名士、各学芸の学者、専門家の会議が設立されるべきである、と。」

この会合の時に決定されたのかどうかは不明であるが、パンジャブ協会の目的は次の五点であった。

- 1) 古典的東洋諸学の復興。
- 2) 国の各層の人々に、有益な学問を現地語により普及させること。
- 3) 産業の振興。
- 4) 学問的、文学的、社会的、政治的その他の諸問題についての討論。
- 5) 州の有力者、有識者層と政府官僚との間の関係の確立。

1860年代は、1857年の「インド大反乱」によって互解した社会体制が再編されていく重要な時期であり、官民双方が、各々の思惑に従って活動を始めた時期である。この時期には、カルカッタ、ベナレス、シャージャハーンプール、アグラ、ラックナウー等、インド各地に社会啓蒙団体が

結成されており、アブドゥル・ラティーフ (‘Abdul Latīf 1828-1893) が、カルカッタに設立したムスリム文芸協会 (Muhammadan Literary Society 1863年設立) や、アフマド・カーン (Sayyid Aḥmad Khān 1817-1898) がガーズィーブールに設立した科学協会 (Scientific Society 1864年設立 同年、アリーガルに移転) などが、特に有名である。パンジャブ協会設立も、このような時代の流れの一環であった⁶⁾。

ところで、興味深いことに、パンジャブ協会設立に当たっては、パンジャブ州政府の関係者が数多く参加している。創立大会の議長を務めたパンディット・マン・プールは、エクストラ・アシスタント・コミッショナーであり、また同時に、パンジャブ州知事の主任事務官 (Mīr munshī) という職にあった。また、この協会の会員となった34名の人々も、エクストラ・アシスタント・コミッショナー、郡長 (Taḥṣīldār), 名誉判事, 州政府事務官, 副視学官等、州政府の関係者が主であった⁷⁾。この辺の事情を、アーガー・ムハンマド・バーキル (Āghā Muḥammad Bāqir) は、その論文「パンジャブ協会」(Marḥūm Anjuman-e Panjāb) の中で次のように述べている。

「私の許には協会の6～7年間分の雑誌が有る。それらを読んで、この協会が政府の示唆で設立されたのだという結論に到達した。1857年以後、人々はイギリス人に対してきわめて悪意を持ち、敵意を持つようになった。イギリス人統治者達はこの敵意を除去して、いくらかなりとも心安らかに統治したいものと望んでいた。この目的を達成するため、彼等はパンディット・マン・プールに指示し、そして、パンディットはそのために地ならしをしたのであった。」⁸⁾

さて、この1月21日の創立大会でパンジャブ協会の会長に推されたのは、G. W. ライトナー (G. W. Leitner 1840-1899) という人物であった。ライトナーは、1864年1月1日に開校したラホールのガヴァメント・カレッジの校長として11月に着任したばかりであった。ライトナーは、ハンガリー生まれの、東洋学の専門家で、1855年のクリミア戦争時にはイギリス軍の一等翻訳官を務め、その後は、ロンドンのキングズ・カレッジで、トルコ語、アラビア語、現代ギリシア語の講師となり、1861年からは、アラビア語とムスリム法の教授であった。ライトナーは、1886年にインドを去るまでに、ガヴァメント・カレッジ校長、パンジャブ協会会長の他、オリエンタル・カレッジ初代校長 (1872年より)、パンジャブ・ユニヴァーシティー初代事務局長 (registrar 1882年より) ともなり、パンジャブ教育界・文化界できわめて重要な役割を果たした。

パンジャブ協会設立をめぐる、先程、アーガー・ムハンマド・バーキルの、パンジャブ州政府主導説とも言うべきものを紹介したが、この他に、ライトナー設立説もある。例えば、ギャレットの『ラホール・ガヴァメント・カレッジ史1864-1914』には、次のように記されている。

「1865年初頭、ライトナー博士は、カレッジ内に弁論・評論協会と地元の紳士達のために Society for the Diffusion of Useful Knowledge を設立した。州知事閣下は、この二つの組織の有用性を非常に高く評価された。」⁹⁾

また、アブル・ライース・スィッディーキーの『今日のウルドゥー文字』にも、イギリス上下院に提出されたライトナーの業績リストの、次のような一節が引用されている。

「彼は『パンジャブ協会』を設立した。その目的は有益な学問を広め、文学的・科学的関心を集める記事を取り上げ、社会・政治問題について土着の人士が自由に表現できる機会を提供することにあった。」¹⁰⁾

以上のように、ライトナーがパンジャブ協会を設立したのだとすると、1864年11月に着任して、翌1865年1月21日にはもう州政府の主だったインド人を集めて協会を設立したことになる。パンジャブ協会設立をめぐる歴史的な事実関係についてはさらに調査が必要であると思われるが、パンジャブ州政府、特に州知事ドナルド・マクレオド (Donald McLeod) が、パンジャブ協会に対して非常に好意的であったことは、紛れもない歴史的事実である。例えば、1865年2月6日、ライトナーが、パンジャブ公教育局長宛に、パンジャブ協会の目的を知らせ、州政府の援助を求める書簡を出したところ、この書簡の報告を受けたのであろう、州知事マクレオドは、3月2日、事務次官に、教育局長宛に次のような書簡を書き送らせているのである。

「ライトナー博士によりラホールに Vernacular Scientific and Literary Society が設立されたことの報告と、当ソサイエティー会員により既に寄贈されたものに加えて、さらに東洋の作品を購入するために150ルピーの援助金を申請する貴翰が、確かに受け取られたことを報告するよう、私は指示されました。

2. それに対する返事として、閣下が申請された援助金を認可されたこと、そして閣下がライトナー博士の尽力を高く評価されておられること、及び、如何なる形ででも、然るべき形で喜んで彼等を助けるつもりであるとの御言葉もお伝え致します。

3. 閣下はこの組織の発展について適宜お知らせ願いたいと考えておられます。」¹¹⁾

この教育局長宛の書簡の内容がライトナーに伝えられたのであろう、1865年3月24日のパンジャブ協会の会合で、ライトナーは、州知事がパンジャブ協会設立を喜び、協会の活動に非常な関心を持っている、と報告している。

4月17日の会合には、パンジャブ州事務次官を始め、ラホールのデビュティー・コミッショナー、アシスタント・コミッショナー、軽犯罪裁判所判事など、州政府の高官が出席し、4月29日の会合には、州知事自らが出席、パンジャブ協会の活動を支持した。

このように、州知事、州政府の支援を得て、パンジャブ協会は、初年度から広汎な活動を開始した。土曜日の夜には講演会が行なわれ、協会の雑誌も発行されるようになった。雑誌発行が決定されたのは、3月31日の会合で、ウルドゥー語でのみ表記されることが決められたが、英語やヒンディー語の論文も掲載されたと言う¹²⁾。この雑誌の名は、Anjuman-e ishā'at-e maṭālib-e mufidah Panjāb とパンジャブ協会の正式名称そのままであり、パンジャブ協会の会合で発表され、好評を博した講演や談事録が掲載された。尚、この雑誌は月刊誌であったようである。また、パンジャブ協会は、図書館も設置し、一般の人々に公開した。1865年末までに、1,430冊のウルドゥー語、ヒンディー語、英語の図書が収められ、26種類の新聞が閲覧出来たと言う¹³⁾。

さらに、パンジャブ協会は、東洋諸語の本を出版したり、普及させたりするための委員会、東

洋医学と西洋医学の比較研究のための委員会なども設置している。これらの他、東洋諸学の復興ということが、協会設立の大きな目的の一つであったので、東洋諸語の普及、発展を図るため、東洋諸語の能力試験が行なわれることとなり、ウルドゥー、ヒンディー、ペルシャ、アラビア、サンスクリットの各語について試験実施委員会も設置された。1866年に試験が行なわれ、74名が受験した。その内訳は、

アラビア語	13名
ペルシャ語	13名
サンスクリット語	21名
ヒンディー語	13名
ウルドゥー語	14名

であり、成績優秀者には賞金が与えられた。

1866年度からは、出版活動も始められた。アーガー・ムハンマド・バーキル作成の表によると、最初の4年間で26冊の本が出版されている。その内容は、アラビア語、サンスクリット、ヒンディー語、パンジャブ語の文法や医学、歴史、思想等に関するもので、英語、ウルドゥー語のみならず、ヒンディー語、サンスクリット、パンジャブ語でも執筆されている。

尚、パンジャブ協会の活動範囲は、ラホールだけに止どまらず、アムリトサル、グルダースプール、カスール、ラワルピンディー等に支部があった。

(2) オリエンタル・ユニヴァースィティー運動

以上のようにパンジャブ協会は、会長ライトナーを中心として、パンジャブで様々な活動を行なったが、協会の提示した重要な理念の一つに、現地語による教育の重視が挙げられる。当時、北インドのカレッジは、カルカッタ・ユニヴァースィティーに統括されており、カルカッタ・ユニヴァースィティーでは、1835年の、「我々は、今、我々と我々の支配する数百万の人々の間を通訳するような階層を作り出すために全力を払わなければならない一血と色はインド人、しかし、嗜好、見解、道徳、そして知性に於いてはイギリス人であるような人々の階層を」というマコーレー (Macaulay) の覚書に従い、教育用語も試験用語も英語であり、教科書を定めて、それを暗記させるような教育を行っていた。ライトナーは、このようなカルカッタ・ユニヴァースィティーの教育体制に全く反対で、現地語による教育を主張、現地語を教育・試験用語とするユニヴァースィティーの設立を訴えるようになる。

パンジャブ州知事マクレオドは、パンジャブ協会の現地語重視の立場を強く支持し、1865年4月29日、初めて出席したパンジャブ協会の会合の席上、英語教育体制の欠陥を指摘するバンディット・マン・プールのスピーチを受けて次のように述べている。

「この国の学生諸君は、大体に於いて、学問を自分の国の言葉で究めてゆくべきであり、自分の言葉を忘れ、外国の言葉で修得しようとするべきではありません。もし、先ず、自分の言葉で完全に

身に付けたなら、外国の言葉で身に付けるのは容易なことでしょう。これについては、校長先生（ライトナーのこと）と教育局長の多大の努力が必要とされるでしょう。』¹⁴⁾

1865年6月10日付の、パンジャブ州政府事務次官からパンジャブ公教育局長宛の書簡にもまた、州知事マクレオドが現地語の発展に並々ならぬ関心を持っていたことが記されている。

「州知事は、パンジャブ州教育局は、現地語文学の創造や進展に対して、これまで行なってきたよりもさらに決定的な措置を取るべき時が来たとの御意見です」と書き出されたこの書簡には、インド国民の将来の発展と密接に結びついた事柄には政府が重要な役割を果たすべきこと、州知事はこの事柄に関する様々な提案を歓迎すること、そして最大限の財政援助を行なう用意のあることが記されており、パンジャブ協会にも回覧された¹⁵⁾。これを受けて、ライトナーは、8月、ラホールの名士、有力者を集め、パンジャブ州知事の方針を歓迎しつつ、パンジャブにユニヴァーシティを設立しようと次のように訴えた。

「念頭にありますのは、この国の諸々の言葉が完成され得るように、昔の東洋教育を復興すべきである、ということであります。それ故、ラホールにユニヴァーシティを設立しようと訴えるものであります。その機能は、文芸等に於いて最も高度な大学となることであり、また、東洋諸学、最近の学問について試験と教育を行なうことであります。そして、現在存在している教育の資源を利用して効果的に拡大を図ることでもあります。東洋諸語が教育の基礎となり、これらの言語によってヨーロッパの学問の教育が行なわれることであり、そして、各人がこの提案の成功のために尽力されることを願うものであります。』¹⁶⁾

ライトナーは、このユニヴァーシティをオリエンタル・ユニヴァーシティ（或いは *Dār-ul-ulūm-e mashriqī*）と呼び、東洋の学問・文学、西洋の学芸の高等教育が行なわれるとし、次のように述べている。

「インドでは、西洋の学芸の建物は、現地諸語の建物の上に築かれるべきであります。ただ現地語の教育によってのみ頭脳の文明化が得られるのであります。それなくしては、如何なる知識もたわ言であり、欺瞞の道具なのであります。』¹⁷⁾

ライトナーの提案は承認され、ライトナーは、9月11日のパンジャブ協会の会合にも、このオリエンタル・ユニヴァーシティ構想を提案し、「このユニヴァーシティの設立によって、この地域に一つの新しい時代が始まり、学問・芸術の成果が全ての人々の手中に収められることでしょう」と述べて、協力を要請した¹⁸⁾。

この会合でライトナーが行なったのは、次のような提案であった。

- 1) 理事会と大学役員の任命。
- 2) 英語の教科書を選定し、それを現地語に翻訳すること、及び東洋諸語の教育を規則的に行なうこと、そして文法書や入門書を執筆させることを職務とする委員会の設置。
- 3) アラビア語、ペルシャ語、サンスクリット語の規則的な教育を行なうこと、アラビア語、ペルシャ語、サンスクリット語で偉大な詩人、歴史家の書物を出版すること、東洋語、東

洋諸学の図書館の設置、拡充のための援助、支援を行なうことを職務とする、東洋諸語のための委員会の設置。

- 4) アラビア語、ペルシャ語、サンスクリット語、ウルドゥー語、ヒンディー語、その他、学生が受けたいと望む学科や東洋語の試験を行なうこと¹⁹⁾。

パンジャブ協会はライトナーの構想を承認し、州知事に働きかけてゆくことを決議した。

ラホールのコミッショナー、副コミッショナー、視学官といったイギリス人高官もこの構想に賛成し、9月27日に会合を開いて、援助委員会を設置した。10月1日、パンジャブ協会の会員とこの援助委員会委員とが合同で会議を開き、オリエンタル・ユニヴァーシティ問題について審議、この時の決定に基づいて、10月13日、ラホールの正副コミッショナーが、このオリエンタル・ユニヴァーシティ構想を州知事マクレオドに伝えた。マクレオドは、この構想に対して賛意を示し、インド政庁に積極的に働きかけることを約束した²⁰⁾。パンジャブ協会とイギリス人協力者達は、ユニヴァーシティ設立に向けて募金運動を開始したが、ユニヴァーシティ設立の夢はなかなか実現しそうになかった。

ところで、この現地語による教育という理念は、パンジャブ州だけで表明されたものではなかった。

1867年8月、北西連合州のブリティッシュ・インディアン・アソシエーションも現地語によるユニヴァーシティ (Vernacular University) の必要を感じ、インド総督にその設立を請願しているのである²¹⁾。ブリティッシュ・インディアン・アソシエーションもまた、英語のみによる高等教育の弊害を除去するため、現地語をもユニヴァーシティの教育用語とするよう訴えたが、パンジャブ協会のオリエンタル・ユニヴァーシティ構想とはかなり異なったもので、請願書には次のように書かれていた。

「この協会 (ブリティッシュ・インディアン・アソシエーションの母体である科学協会のこと) の目的は、決して、東洋諸語の教育を、それらの古くて、時代遅れの学芸とともに行なえ、というものではありません。そうではなく、その見解というのは、国の諸々の言葉を強化し、西欧の学芸の教育を、現地語を通じて行なおうというものであります。尤も、人々は、東洋の学問、言語を望んでおり、それらを大層、有益で興味深いものだと思っておりますけれども。」

「パンジャブのユニヴァーシティの目的は、東洋諸語を復興することであります。我々のユニヴァーシティの目的は、ヨーロッパの学問、文明を全国に現地諸語によって普及することであります。」²²⁾

パンジャブ協会のオリエンタル・ユニヴァーシティ構想では、東洋語、東洋諸学の復興、普及と並んで、西欧の学問の、現地語による普及が目的とされており、ブリティッシュ・インディアン・アソシエーションの、以上のような指摘は誤解に基づくものであったと言わなければならない。オリエンタル・ユニヴァーシティという名称が、誤解を生んだのであろうか²³⁾。ともあれ、ライトナーを指導者とするパンジャブ協会とアフマド・カーンを指導者とするブリティッシュ・

インディアン・アソシエーションとでは、同じように現地語によるユニヴァーシティ設立を目的としながらも、その教育理念には大きな違いがあったことを確認しておかなければならないであろう²⁴⁾。

1867年9月5日、インド政庁は、このブリティッシュ・インディアン・アソシエーションの請願に対して、実現不可能であると回答し、請願書と、それに対する意見書を、パンジャブ州政府にも送付した。パンジャブ州知事マクレオドは、関係者の意見を求め、新ユニヴァーシティ設立は困難であり、カルカッタ・ユニヴァーシティに教育路線の変更を求めるべきではないか、と自分の意見を述べた。

1868年2月、カルカッタ・ユニヴァーシティは、教育路線を変更する意志のないこと、北インドに独自のユニヴァーシティを設立すべきであるとの見解を表明、それによってユニヴァーシティ設立に向けての動きが活発となった。デリーでは、デリーにユニヴァーシティを設立しようという動きが見られた。3月12日、マクレオドは、関係者の大会を開いて、ラホールにユニヴァーシティを設立すべきことを決議し、5月25日の会議では、インド政庁に送る請願書が審議され、承認された。これは、5月27日、インド政庁に送付された。

9月19日、インド政庁は、これに対して、新しいユニヴァーシティを設立するよりも、まず、現存のガヴァメント・カレッジを発展させるべきである、と回答した。

11月12日、マクレオドは、インド政庁の回答に対して遺憾の意を表わし、完全な形でのユニヴァーシティ設立に問題があるのであれば、不完全な形ででもユニヴァーシティ設立を認めて欲しいと要請した。1868年11月20日と1869年2月11日にもインド政庁に請願書が送られた。5月23日、インド政庁は遂にパンジャブ州政府の要請を認めた。ただし、ユニヴァーシティとしての設立は承認されず、学位を授与することの出来ない、ユニヴァーシティ・カレッジとしての承認であり、名称は、ラホール・ユニヴァーシティ・カレッジとされた²⁵⁾。また、このユニヴァーシティ・カレッジでは、英語と西欧の学問が教育され、いくつかの科目の教育は現地語で行なわれることとされた。

パンジャブ協会は、インド政庁の提案を審議し、インド政庁の恩恵には感謝するが、ユニヴァーシティの設立による東洋諸語、東洋諸学の復興という目的はインド政庁によって無視された、と遺憾の意を表明した。これに対して、パンジャブ州知事マクレオドは、インド政庁のせっきくの提案に反対すべきではない、と戒めた。パンジャブ協会は、このユニヴァーシティ・カレッジが東洋諸語、東洋諸学の発展に尽力すべきこと、現地語で有益な学問が教育されている間は、英語は選択科目たること、理事会にインド人が参加すること、を条件に、インド政庁の提案を受け容れた。

8月5日、イギリスのインド相より、インド政庁の決定を承認する書簡が送られ、12月8日、ラホール・ユニヴァーシティ・カレッジの設立が宣言された。翌1870年1月11日、第一回理事会が開かれた。5月の理事会で、パンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジと名称が変更され、

6月27日、州知事はこれを了承した。パンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジが、完全なパンジャブ・ユニヴァーシティとなるのは、1882年のことである。尚、ライトナーは、パンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジの初代事務局長となった。

こうして設立されたパンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジは、次のような目標を掲げていた。

- 1) パンジャブの現地語により、可能な限り、ヨーロッパの科学の普及と、一般的に、現地語の文学の改善と発展を促進する。
- 2) 東洋の諸古典語及びその文学の進んだ研究を奨励する。
- 3) 公教育の発展と監督について、州の有識者、有力者階層を政府官僚と結びつける。

英語の教育も重視され、現地語で教育が十分行なわれない場合は、英語で教育が行なわれることとされ、当初は、以下の四学部が設置された。

- 1) 文学部 この中に東洋副学部 (Oriental Sub Faculty) が置かれた。
- 2) 医学部
- 3) 法学部
- 4) 工学部

東洋諸語、東洋諸学の復興というのは、パンジャブ協会の主要目的の一つでもあり、オリエンタル・ユニヴァーシティ設立運動の目的の一つでもあった。この目的を実現するために、1870年、パンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジは、さっそくオリエンタル・スクールを設置している。1872年には、カレッジのクラスも開設され、オリエンタル・カレッジと名称を変更、ライトナーが初代名誉校長となった²⁶⁾。

(3) 1874年の詩会

1865年のパンジャブ協会の設立から、1870年のパンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジの設立に至るまでの時期は、カルカッタ中央に対して、パンジャブの、いわば地域ナショナリズムが闘いを挑んだ時期であったと言えるが、1870年以後は、闘いの一応の成功を基礎に、パンジャブは、教育・文化の面では一種の安定期、拡充期に入ると考えても良いであろう。所謂「パンジャブ協会の詩会」が始められたのは、このような時期なのであった。

詩会を行なうことがパンジャブ協会で発表されたのは、1874年4月19日のことであった。M. H. アーザードの研究者として有名なムハンマド・サーディク (Muhammad Sādiq) の論文「アーザードと詩会」(Āzād aur bazm-e mushā'irah) によると、会合は夕方の6時から始められたが、その会合で、当時ガヴァメント・カレッジのアラビア語教官であったアーザードが、ウルドゥー詩について重要な発言を行なうことを知っていたカレッジの学生達が、早くから数多く会場に詰めかけていた。カレッジの学生、そして教官の他、パンジャブ州事務次官、教育局長ホルロイド (W. R. M. Holroyd)、ラホールの正副コミッショナー、建設局長など州政府の要人も出席していた。議

長を務めたのは Boulnois という判事であった。

会合はまず、アーザードの講演から始められた。アーザードの講演に演題が有ったのか、無かったのか、また、有ったとすれば何であったのかは、手元の資料では不明である。

アーザードの講演はそれ程長いものではなく、本にすると10ページ程度のものであった。その要点はおおよそ次のようなものであった。（詳しくは後に検討する。）

- 1) ウルドゥー語はインドのブラジ・バーシャーがペルシャ語の影響を受けて成立したもので、ペルシャ語によって多くの文学的技法が得られたが、逆に、ペルシャ語を模倣しようとするあまり、インド性を失ってしまった。
- 2) 真に優れた雄弁さとは、単に言葉や技巧の素晴らしさだけで生み出されるのではなく、事物を観察して得られる思い、感情を相手にうまく伝えることを意味する。
- 3) 現在に於いては、新しい題材、新しい表現方法の可能性は英語の中に見られるので、それらを適当な形で獲得するよう努力しなければならない。
- 4) 恋愛ばかりが詩の題材となってしまうのは悲しむべきことである。
- 5) ヒンドゥーもムスリムも、各々の言語的・文化的遺産を生かして、感動を与える文学の創造に努力すべきである。

以上のような講演の後、アーザードは自作のマスナヴィー「偉大なる夜」を朗読し、聴衆の称賛を浴びたと言う。

この後、パンジャブ州教育局長ホルロイドが、ウルドゥー詩の現状について、英語で次のような講演を行なった。

「この会合が開かれたのは、いくつかの病のために衰退と不運の中にあるウルドゥー詩の、その発展のための手段を提供するためであります。このために、名士の方々、知識人の方々、そして詩や書物に関心をお持ちの方々全てに、出来る限りこの事に注意を向けて頂きたいとお願いするものであります。」

「今、私は、どの町でも、普通、詩作が行なわれておりますように、皆さん方も詩会を行なわれますよう、ここに提案致します。ただし、ここでは、規定の半句の代わりに何か決まった題材が与えられるようにし、それに基づいて全ての人が創作して持ち寄り、一般集会で朗読するようにするのです。この事が継続されたなら、一年の後には、最も優れた作品を書かれた方々には、特別に報奨も与えられるべきであると私は思います。私が皆さん方の前で行なった提案が、もし、うまく実行されましたならば、1874年はインドの歴史に永遠に名をとどめることでしょう。そして人々は言うでしょう、ウルドゥー詩の古い方法がどのような人々の努力によって墮落の底から脱け出し、発展の極みに達したか、ということ。私の意見では、一ヶ月毎にこの会合を開くこととし、次に会合が開かれる時には、全ての詩人が『雨季の称賛』について書くようにしたら良いと思うのであります。」

この後、ラーエ・モール・スィング（Rāe Mōl Singh ラホールの名誉判事）とパンディット・バ

サント・ラーム (Pandit Basant Rām) という人物が賛同の意見を述べ、最後に議長もホルロイドの提案を支持する発言を行なった。

この会合の後、ホルロイドは、他の州にも新しい詩の考えが伝わるようにと、他の州の教育局に、アーザードの詩と講演のコピーを送り、印刷して各学校に配付するよう依頼した。

この会合を開催したのは、パンジャブ協会の指導によるものではなく、パンジャブ州政府の指導によるものであった²⁷⁾。アーザードの講演とマスナヴィーも、次の資料が明白に示しているように、教育局長ホルロイドの指示によるものであった。

- 1) アーザードの弟子グラーム・ハイダル・ニサル (Ghulām Haidar Nithār) の「ウルドゥー詩」 (Nazm-e Urdū) という短い文章。

「教育局長閣下は、上記の年 (1874年) に私の師アーザード教授に指示されました。アーザード教授はその意図に基づいて然るべき時に講演をお書きになり、夕刻の到来の有様をマスナヴィーの中でお示しになりました。閣下の提案で日時が決められました。会合が開かれ、有識者、文人が集まりました。上記の講演と詩が読まれ、全ての人が協議して、詩人達があらゆる種類の題材について詩作するよう、詩会が設けられました。」²⁸⁾

- 2) アーザードの息子アーガー・イブラーヒーム (Āghā Ibrāhīm) の、『アーザード詩集』への序文。

「即ち、閣下 (ホルロイド) の指示によって彼 (アーザード) は、この新しい形式の詩を書く基礎を築いたのであった。それは今日、識者も一般人も書き出しており、どこの家でも興味をもって読まれているものである。」²⁹⁾

さらに、この会合を開催するに当たっては、当時のパンジャブ州知事の関心によるところが大であったことにも注意しておく必要がある。教育局長ホルロイドは、その講演の中で、パンジャブ州事務次官からの、自分宛の手紙を引用しているが、それは次のような内容のものであった。

「州知事閣下は、委員会が一言も述べておらず、また、閣下の観点からはこの国の教育局の役割に有る者にとって考慮すべきであるもう一つの問題について指示されていますが、それは、現在用いられている、或いは教えるのを委員会が推薦したウルドゥー語の教科書には、ウルドゥー語の詩が全くないという問題です。… (略) … 貴殿に考慮して頂きたいのは、我々の村や郡の学校で、道徳、忠告、そしてあらゆる事の姿が写実されているようなウルドゥー詩の選集が、学習に取り入れられないか、ということです。この種の選集は、ソウダー、ミール・タキー、ゾウク、ガーリーブの著作から編集可能でしょうか。もし、こういった詩人の詩集や現存のマスナヴィーからこういう選出が可能でないならば、指示によりお聞きしたいのは、現代の詩人達によって、特に学校で用いるために、このような詩の創作が実現され得るか否か、ということです。もし、このようにして、公立学校を通じて、非宗教的な、インドの国の詩が発展し、現在、非常に流行している馬鹿げた詩が、次第にそれにとって代わられたならば、大変素晴らしいことです。」

教育局長ホルロイドは、州知事の、以上のような意向を受けて、4月19日の会合を開催し、その

後、詩会を行なっていたのであったが、現地語・現地語文学の振興は、既に見たように、マクレオドの時代からの、パンジャブ州政府の政策であり、このウルドゥー詩改革運動もその延長線上にあるものであったと考えることが出来る。これは何もパンジャブ州政府だけに見られることではなく、他の州政府でも、現地語・現地語文学の振興策・改善策の採られている所がある³⁰⁾。

カルカッタ中央のインド政庁もまた、1860年代後半以降、インド諸語に好意的になってきていた。先に見たように、1867年8月、ブリティッシュ・インディアン・アソシエーションが、現地語のユニヴァーシティ（Vernacular University）設立の請願をインド政庁に対して行なった時、インド政府はこれを拒絶したが、この請願への、1867年9月5日付の回答の手紙の中で、次のように、英語からの翻訳を高く評価しているのである。

「総督閣下及び全ての地方政府は、貴殿の協会や政府にとって好ましく思われる目的（英語からウルドゥー語への翻訳）を発展させようという、例えば貴殿の協会のような団体や、或いは特定の個人の、全ての努力を大きな喜びをもって評価致すものであります。」「我々は、大学の教科書が現地語に翻訳されるのを望むだけでなく、学問、芸術の広い分野に学生を向かわせたいと願っているのです。しかしながら、この目的のための十分な材料が現地語には未だありませんので、今少し、インドの人々は英語を通じてこれを達成しなければなりません。」「総督閣下は、アリーガルの科学協会が、ヨーロッパの学芸を現地語に翻訳するために採った方法に対して、特別なる喜びを表明されておられます。」³¹⁾

ハーリーによれば、この手紙は、ピヤーレー・ラール（Piyārē Lāl）、ザカーウッラー（Dhakāullāh）、ダルム・ナラーヤン（Dharm Narāyan）といった人達を初めとする、数多くの人々の、英語からウルドゥー語への翻訳活動を促進したという³²⁾。

インド政庁の、インドの言葉の発展への好意的な態度—勿論、英語の絶対的優越性は堅持されている—は、1869年のパンジャブ・ユニヴァーシティ・カレッジ設立の承認にも見てとることが出来るし、また、1871年には、インド総督メイヨー（Mayo）が、ムスリムの教育に関して、ムスリムの古典語、地域語を学校教育で奨励する政策を打ち出し、1873年には、それが実行に移されているとのことであり³³⁾、パンジャブ協会の詩会の行なわれた1874年は、州政府の政策から見ても、インド政庁の方針から見ても、インド地域語・文学の発展にとって有利なように情勢が推移していた時期であったと言えよう。パンジャブでウルドゥー語の詩が問題として取り上げられたのは、元々は、パンジャブ州知事の個人的な発案によるものであったが、地域語・地域語文学の振興は、この時代の、時代的な問題となっていたのであった。

地域語・地域語文学の振興策が採られたのには、ナショナリズムの勃興に対して、対決するよりも、融和策を採った方が良いとの政治的判断も、勿論、あったであろうが、統治というものは、所詮、統治機構の中の人間が行なうものであり、この時代の動きを追おうとする時、イギリス人統治者、行政官各人の「人間」を、即ち、各人の心情、嗜好、思想を考慮に入れる必要があるであろう。パンジャブ州に限って言えば、州知事マクレオド、教育局長ホルロイドの「人となり」を見てみ

る必要があるであろう³⁴⁾。

パンジャブ協会の詩会を見るに当たって、考えてみなければならない重要な問題がある。それは、この詩会に於けるアーザードの役割についてである。

1874年4月19日、ウルドゥー詩の改革を訴え、5月30日から、翌1875年3月30日まで、ほぼ毎月1回の割合で開催された9回の詩会に全て出席、自作のマスナヴィーを発表したアーザードの立場についてどのように考えれば良いのであろうか。このパンジャブ協会の詩会が開かれるようになったのは、パンジャブ州知事の意向を体した、教育局長ホルロイドの指導によるものであったことは明白であり、従って、ハーリーの、「1874年、筆者（ハーリーのこと）が、パンジャブ州政府出版局におり、ラホールに居住していた時、マウラヴィー・ムハンマド・フサイン・アーザードの発案、パンジャブ州教育局長ホルロイド大佐の協力で、パンジャブ協会は詩会を開設し、それは、毎月1回、協会の建物で開催されたのであった」³⁵⁾という言葉は誤りで、むしろ逆に、ホルロイドの方が主導的立場にあったと見るべきであるが、ここで問題になってくるのは、アーザードは、全くホルロイドの指導に従うだけであったのかどうか、ということである。この点に関しては、アーザードの詩会での活動は、全く受動的なものであったとする、タバッスム・カーンミーリー (Tabassum Kāshimīrī) の説と、詩会そのものは州政府主導であったが、アーザードはそれを積極的に活用したとする、アスラム・ファッルキー (Aslam Farrukhī) の説とがある。

タバッスム・カーンミーリーによれば、「彼は詩会に対して真剣ではあったが、しかしそれは、それが彼の職務の一部であったからである。そして彼はその義務を成功裡に果たしたのであった。しかし、彼の詩的実験は継続しなかった。何故なら、彼に任せられた運動は、彼の基本的な資質に合致するものではなかったからである。もし、彼に近代の意識があり、そして彼が新しい詩の運動に真剣であったならば、彼の詩は前進し、そしてそれには新しい可能性が誕生していたことであろう。しかし、彼の詩は、決められた主題のとりことなってしまう、そして彼は一定の限られた実験から先へと自分の詩的実験を押し進めることが出来なかったのである。」³⁶⁾

これとは逆に、アスラム・ファッルキーは、次のようにアーザードの、この詩会に対する積極性を強調している。

「州知事の望みというのは、単に、教科書のために詩が得られたら良い、というだけのものではあった。しかし、アーザードの先見の明は、地平線の上に新しい太陽を見ることを望んでいた。彼は、この運動を利用して、ウルドゥー詩の向きを変えようと望み、そしてそれを限定された主題の枠内から引き出して、無限の広がりを与えようと望んでいた。これ以前にも、彼は、1867年にも、その講演『詩と韻文についての考察』 (Naẓm aur kalām-e mauzūn ke bāb men khayālāt) の中で少しこの種の考えを述べていたが、今や天与の機会が手に入ったのであった。」³⁷⁾

「発案はホルロイドの、努力はアーザードのものであり、そして目的は非常にありふれたものであった。しかし、アーザードは自分の個人的判断によって、そのありふれた目的を高邁なものとしたのであった。」³⁸⁾

両者の見解について考えてみようとする時、まず、確認しておかなければならないのは、アーザードは、1865年のパンジャブ協会設立の年から協会の会員となり、1867年から1868年まで、協会の書記も務めたが、パンジャブ協会会員、そして書記として、アーザードは、社会、経済、教育等の様々な問題について発言しており、それらは全て啓蒙的、改革主義的な内容であった、という点である。当時の講演の原稿の多くが、ラホールの文学向上会議(Majlis-e Taraqqī-e Adab)から『アーザード論文集』(Maqālāt-e Maulānā Muḥammad Ḥusain Āzād, 全2巻, 1966, 1978)として出版されているが、それを読むと、アーザードには、非常に明確な、時代に対する意識—改革の必要の認識—があったこと、そして、1874年以前から、このような意識をもってアーザードは、ウルドゥー文学の現状打破の必要性をも説いていたことが分るのである。それは萌芽的な形で、講演「ウルドゥー語」(Zabān-e Urdū 1867年7月)に見られ、その後、「詩と韻文についての考察」(既出 1867年8月)、「ペルシャ語とウルドゥー語の文章」(Inshā-e Fārsī-o-Urdū 1868年2月)の中で展開されている³⁹⁾。1874年の、ウルドゥー詩の改革を訴える講演は、ホルロイドの指示によるものであったとはいえ、アーザードが、1860年代後半から、ウルドゥー文学の墮落とその改革の問題について考えていたこと、ウルドゥー詩改革の早くからの提唱者であったことを忘れてはならないであろう。勿論、ウルドゥー詩の改革を、新しい形式の詩会の開催という形で実現したのは、教育局長ホルロイドの力によるものであったことも、確認しておかなければならないであろう。アーザードは、1860年後半から、ウルドゥー文学の現状打破の問題に関心を寄せ、発言もしていたので、ホルロイドの目に止まり、協力を要請されたのではないであろうか。

さらに、アーザードの詩の発展性のなさ、という、タバッスム・カーシミーリーの指摘についてであるが、アーザードの詩に発展性がないのは、基本的には、アーザードに詩才がなかったからであろう。いくら近代的な意識を持っていたにせよ、それを詩で表現するには別の才能が必要なのである。

ところで、ファッルキーの説にも問題がないとは言えない。ファッルキーは、詩会開催の目的は、単に、教科書に掲載する詩が必要だったからに過ぎなかったが、アーザードは、ウルドゥー詩そのものの改革を望んでいた、としているが、ホルロイドはその講演の中で次のように述べているのである—

「この会合が開かれたのは、いくつかの病のために衰退と不運の中にあるウルドゥー詩の、その発展の手段を提供するためであります。」

「州知事閣下は、詩を学ぶことは必要であるとおっしゃっておられ、恐らく、学校から、学んで社会へ出る生徒達は、一つの清らかな泉となり、国中に洪水を起こすことだろう、と希望されていますが、勿論、これはとても適切な手段であります。しかし、私から見ると、もう一つの事も考慮すべきであります。それは、もし皆さんが実行されますならば、非常に早くその結果が現われるものであります。」

「偉大な詩人というのは、悲しい話をすれば人を泣かせるものであり、喜びの話をすれば人を喜

ばせ、勇気の話をしては人を闘わせ、暴虐の話をしては暴虐を行なう者に対して反感を抱かせることがその言葉の力の中に有るものであります。…(略)…詩人は、書く時には、聞くや否や人間の心が正義の方を向き、そして同情、貞節、美德の方を向くように書かなければなりません。庭園の緑、日没の時の地平線の美しさ、そして日の出の時のその輝く姿一神の完全性の顕われであるものを、詩人こそ良く理解するのであります。ですから、詩人は、これらの情景の描写によって、上下を問わず全ての人の心に、困難の時には助言を得、喜びの時にはこの目に見えぬ恩恵に感謝するように、感動を与えなければなりません。」

この後、ホルロイドは、新しい形式の詩会を開催してはどうか、と提案するのであるが、以上のように、ホルロイドは、この会合の目的を、墮落してしまったウルドゥー詩に発展の手段を与えるため、と明確に意識しており、学校教育を中心に考えていた州知事とは異なり、詩会を開催して、人々に感動を与えるような、道徳的な詩、自然を主題にしたウルドゥー詩を生み出そうとしていたのである。従って、アーザードと同様、ホルロイドもまた、学校教育という狭い視野からではなく、ウルドゥー詩の現状打破の問題を、より広い視野から考えていたと言わなければならないであろう。

ホルロイドの提案した、新しい形式の詩会は、5月30日に、「雨季」という主題で開催され、その後、「冬」、「希望」、「郷土愛」、「平和」、「正義」、「美德」、「満足」、「文明」という主題で、ほぼ毎月1回、1875年3月まで、全部で9回行なわれた。これらの詩会が、具体的にどのようなものであったのか、アーザードやハーリーはどのような詩を発表したのか、ということは、章を改めて詳しく検討してみることとしたいが、本章を閉じる前に、ここでもう一つ検討しておかなければならない問題がある。それは、この詩会が、何故終了したのか、という問題である。何故なら、以下に見るように、この問題は、詩会に於けるアーザードの位置や教育局長ホルロイドと詩会との関係を探る上で、きわめて重要なものであるからである。

詩会が何故終了したのか、ということについて、ムハンマド・サーディクは、論文「アーザードと詩会」の中で、次のような理由を挙げている。

1) 時期尚早であったから。

「私の意見では、詩会の失敗の最大の原因は、それがかなりの程度、時期尚早であったということである。これは一つの明白な事実であるが、各時代の文学は、『時代精神』と呼ばれる、時代の要請の鏡なのである。しかし、詩会の基礎が置かれた時は、この時代精神が形成されていなかったのである。勿論、新しい時代を建設すべき諸価値の、一つのぼんやりとした姿が地平線の上に現われてはいたが、しかし、未だその容貌は明確とはなっていなかった。詩会はその不完全な姿の反映なのである。」⁴⁰⁾

2) アーザードの性格。

「アーザードの生涯から分ることであるが、アーザードには、思いやりの徳性が非常に少なく、アーザードの気性の中には、猜疑というもの非常に多く、そのため、人々はアーザードを心よく思わなくなっていた。詩会でもそのような事が起こったのである。」

3) 周囲の人々のアーザードに対する嫉妬心。

「アーザードは詩会で誰よりも先頭に立っていた。彼は政府高官の信頼を得ていた。それで彼の同時代の人々は彼に嫉妬し、彼を貶め、辱しめようとしていたのであった。特に、アーザードが、自分の後を従っている若い詩人達に対して、ひいきをすると、彼等の羨望の炎はさらに強くなったのであった。しかし、忘れてならないのは、詩会と縁を切った詩人達の中にハーリーもいた、ということである。そして、マウラーナー・ハーリーのような、天使の如き人ですら詩会に満足していなかったことを思う時、アーザードの反対者達の不平、不満は、さらに正当なものとなるのである。」

以上が、ムハンマド・サーディクの見解であるが、これに対してアスラム・ファッルキーはこう反論している—

- 1) メーラットやデリーでも同種の詩会が開催され、詩人達は新たな詩題の広がりを得、ウルドゥー詩に新しい表現形式が始められたのであるから、詩会は時期尚早でもなければ失敗でもなかった。
- 2) アーザードの性格のせいで詩会が終わってしまったというのもおかしい。詩会から金銭的な利益（報奨金）を得ようとして得られなかった者達がアーザードに敵対しただけのことである。

ファッルキーによれば、詩会が終了した本当の理由は、「教育局の役人達が、自分達の目的は達成され、自分達の運動は全国に受け容れられ、今やこのような政府の援助、支援なしでも前進し続けるであろう、と感じたから」であった。「教育局の目的は、単に道を示すことにあった。目的地まで到着させることではなかった。」⁴¹⁾

ファッルキーはさらに、ホルロイドの目的は州知事を満足させることであり、この目的が達成されたから詩会は終わった、ともしているが、しかし、既に見たように、ホルロイドの目的は、単に州知事を満足させることではなかった。

また、ムハンマド・サーディクが言及している、ハーリーに関して言えば、「ハーリーは、詩会に見切りをつけたのではなく、ラホールから転勤して、デリーに行ったのであり、従って、ハーリーが詩会から離れた理由はアーザードではあり得ない。」ただし、アーザードがハーリーを嫌うようになっていたことは確かで、その理由は、ハーリーの信奉者、弟子がアーザードを攻撃する論評を行っていたからである。「アーザードは、ハーリーこそ全ての騒動の責任者であると見做し、そしてハーリーを嫌うようになったのである。」⁴²⁾

以上が、サーディクに対するファッルキーの反論である。両者の見解を検討してみると、まず第一に、時期尚早であったから詩会は終了したとするサーディクの説は、余り説得力があるとは考えられない。60年代からの改革・啓蒙運動の流れを考えてみるならば、詩の改革運動は、起こるべくして起こったと言うべきで、しかも、ファッルキーの指摘によると、メーラットやデリーでも同種の詩会が開催されるようになったのであるから、決して時期尚早であったとは思われない。ただ、

下からの詩改革運動ではなく、上からの、官製の運動であったことは確かで、この意味では、まだ新しい詩を生み出すようなエネルギーが民衆の間に現われていなかったとは言えるのであるが、だからこそ州の教育局が運動を始めたのであり、かつまた、それなりに詩会は維持されてもいたのであるから、詩会を打ち切りにする理由は別にあったと考えなければならない。

第二に、アーザードの性格、周囲の嫉妬という問題についてであるが、当時の資料には、アーザードの詩や、その性格に対しての批難が見られ、反アーザード派のようなものが存在していたようであるが、だからと言ってそれが詩会終了の直接の原因になるとは考えにくいであろう。反対派がいたからといって、運動が消滅してしまう訳ではないのである。これに関して興味深いのは、1875年3月13日に開催された最後の詩会についての、反アーザード派の一人が書いた報告記事である。この中で筆者は、詩会に参加していた優れた詩人達をアーザードは追い出してしまい、「将来、アーザード氏がこの会合に足を踏み入れるなら、有名な詩人は一人もそれに参加しないであろう」とアーザードを批難し、次のように続けている――

「聞くところによると、フマー、アター、ラフィークに、教育局長閣下は、その御宅で、ムハンマド・フサイン・アーザードを通じて報奨金を授与され、各人、15ルピー以内であったとのこと。今や、ここでも、アーザード氏が推した人が報奨金を得たことが分るのである。…(略)…もはや、この詩会には、最近は、未熟な詩人がよく来、或る者は野菜売りであり、或る者は菓子屋などであり、その中ではアーザード氏が偉大な詩人と見做され得るのである。」⁴³⁾

このように、アーザードは激しく批判されており、サーディクはこれを、詩会終了に至る原因を明らかにするものとして引用しているのであるが、この記事は、詩才の有無はともかく、詩会には詩人達が来ていたこと、アーザードが推薦した詩人に、教育局長が報奨金を与えるという、アーザードと教育局長との間に、良好な、少なくとも陰悪ではない関係があったことをも明白にしている訳であり、反アーザード派の存在が、直接的に詩会終了の原因になったのではないことを示していると考えられるのである。

以上のように検討してみると、サーディクの見解は、説得的でないとと言わなければならないが、しかし、ファルキーの見解もまた十分に説得的ではないと言わなければならない。ファルキーは、教育局が、既に所定の目的は達成された、として詩会を打ち切ったとしているが、それを証明する記録を一切提示していないのである。証明する資料がない限り、ファルキーの見解は推測の域を出ないのであり、詩会打ち切りの真の原因は、未だ闇の中にあると言わなければならないのであるが、以上の、詩会終了の原因をめぐる議論から、少なくとも、アーザードが、詩会の運営に於いて、相当の権限を持っていたことが明らかとなるのである。

註

1) 日付に関しては、いくつかの説がある。

Āghā Muḥammad Bāqir (ed.), *Maqālāt-e Maulānā Muḥammad Ḥusain Āzād*, Vol. 1, Lahore, 1966 では、

1874年5月8日であり、Muhammad Sadiq, *A History of Urdu Literature*, Karachi, 1985（第二版）では1874年5月9日、同じ著者の、*Āb-e Hayāt ki Ĥimāyat men aur Dūsrē Mazāmin*, Lahore, 1973 では1874年4月19日となっている。

Tabassum Kāshimīrī (ed.), *Naẓm-e Āzād*, Lahore, 1978 に引用されている、当時の新聞 Kōh-e Nūr では1874年4月19日となっているので、本稿では、この日付を採用することとする。

- 2) 「偉大なる夜」とは、ラマザン月27日の夜のことで、コーランの啓示された聖なる夜とされている。
- 3) 規定の半句を見ると、使用すべき韻律、反復語句、脚韻が分る。
- 4) 9月3日とするものもある。
- 5) 何日であったかは不明。
- 6) 例えば、科学協会が目的としていたのは、次のようなことであった。

「文学、及び学問の書物を英語からウルドゥー語に翻訳させて、西欧の文学、西欧の学問の精神をインドの国の人々に生み出すこと。学問的な事柄について協会で講演を行なうこと。臣民の考えを政府に、そして政府の統治原則を臣民に、ウルドゥー語、英語の二つの言語で発行する新聞によって明らかなものとする。ヒンドゥー、ムスリム、イギリス人三者の会員をそれに参加させること、そして、そのようにして、民族的異和感、宗教的偏見、そしてインド人の心の中の、イギリス人に対する恐れを次第に減じてゆくこと。」

(Altāf Husain Hālī, *Hayāt-e Jāvid*, New Delhi, n.d., pp. 332-333)

- 7) パンジャブ協会会員34名中、33名がインド人で、ラホール、アムリトサル、スィアルコート、ラワルピンディー、グジュラート、バヌーン (Bannu) のエクストラ・アシスタント・コミッショナー計6名の他、タフスィールダール、ジャーギールダール、名誉判事、サルリシュエダール（主任事務官）、副視学官、マドラサやカレッジの教官、翻訳担当官、外科医、メディカル・カレッジ学生等が会員となっていた。詳しくは、アーガー・ムハンマド・バーキルの論文「パンジャブ協会」を参照。
この論文は、1944年、『オリエンタル・カレッジ・マガジン』に掲載され、過去の重要論文を収めた *Maqālāt-e Muntakhabah Oriental College Magazine*, Lahore, 1970 に再録された。
- 8) *Maqālāt-e Muntakhabah Oriental College Magazine*, Lahore, 1970, pp. 130-131.
- 9) Garrett, H. L. O., *A History of Government College, Lahore* 1864-1914, Lahore, 1914, p. 3.
- 10) 加賀谷寛編訳、『近代ウルドゥー文学史研究』、東海大学出版会、1979, p. 38.
- 11) Tabassum Kāshimīrī, “Anjuman-e Panjāb, Oriental University ki tahrik aur Sir Sayyid Aḥmad Khān” (*Mujallah-e Tahqiq*, Lahore 1981 所収), p. 57.
- 12) Muḥammad Hanif Shāhid, “Akḥbārāt-o-Rasā’il-e Anjuman-e Panjāb” (雑誌 *Ṣaḥīfah*, Lahore 1972年4月号 所収) によると、グルムッキー文字も使用されたということである。
- 13) ‘Abd al-Ḥaqq (ed.), *Khutbāt-e Garcin de Tassy*, Vol. II, Karachi, 1974, p. 117.
- 14) Tabassum Kāshimīrī, 前掲論文, p. 57.
- 15) Tabassum Kāshimīrī, 前掲論文, pp. 58-59.
- 16) Ghulām Husain (ed.), *Tārīkh-e University Oriental College, Lahore*, Lahore, 1962, p. 7.
- 17) Tabassum Kāshimīrī, 前掲論文, p. 60.
- 18) Ghulām Husain, 前掲書, p. 9.
- 19) Ghulām Husain, 前掲書, p. 8.
- 20) この数週間後、ラホールとアムリトサルの有力者達が、65名の署名とともに、ユニヴァーシティ設立の嘆願書を州知事に提出している。これに対して州知事は、1866年2月2日、現地語教育を支持し、激励する返事を出している。（これについては、Ghulām Husain の前掲書の付録を参照。）
- 21) ブリティッシュ・インディアン・アソシエーションは、インド人の見解や要望をイギリス側に伝えるため、1866年5月10日、アフマド・カーンによって設立された。
尚、この時、提出された請願書は、アフマド・カーン自身によって書かれたものとされている。
- 22) Ghulām Husain, 前掲書, pp. 11-12.

- 23) オリエンタル・ユニヴァーシティ運動の協力者で、後にパンジャブ州知事となったチャールズ・エチソン (Charles Aitchison) は、次のように述べている。
『『オリエンタル・ユニヴァーシティ』という名称は—この名称の下で最初に運動が始められたのです—が一或点では不運なものでした。それは、この運動は高等英語教育への反発であり、ウィリアム・ベンティンク卿の時代から闘われていた、オリエンタリストとアングリシストの論争を再び引き起こす試みであるという考えをいくつかの所で生じさせたのです。この大きな誤解に、この運動が直面しなければならなかった、長期にわたる政府の冷たい態度と土着社会の限られた部分からの直接的な反対は、主に原因しているのです。』
(Ghulam Husain Dhu al-Fiqār, *Ṣad Sālah Tārīkh-e Jāmi'ah-e Panjāb*, Lahore, 1982, p. 66.)
- 24) この点に関して、グラーム・フサインは次のように記している。
「アソシエーションの見解は、教育は現地語で行なわれるべし、というもので、東洋諸語の教育には反対であった。しかし、協会の見解は、ウルドゥー語とヒンディー語は、アラビア語、ペルシャ語、サンスクリット語—これらからこの二つの言葉は生まれた—の教育が強化されない限り、完全なものとはならない、というものであり、従って、第一の原則は、東洋諸語を、再び、ウルドゥー語とヒンディー語の完成のために行なうべしというものであり、第二は、現地諸語によって西欧の学問、芸術を普及すべしというものであった。協会は、アソシエーションの提案を一方的であるとし、北西連合州との協調を好ましくないと見做した。そしてパンジャブのために、ラホールを拠点とする別箇のユニヴァーシティを要求した。パンジャブ協会会長ライトナー博士は、協会の決定を、自分の書簡とともに、1868年3月18日、政府に送った。」
(Ghulam Husain Dhu al-Fiqār, *Ṣad Sālah Tārīkh-e Jāmi'ah-e Panjāb*, Lahaore, 1982, pp. 15-16.)
- 25) パンジャブ協会は、何時頃からかは不明であるが、設立されるべきユニヴァーシティの名称を、オリエンタル・ユニヴァーシティからラホール・ユニヴァーシティに変更していた。
- 26) パンジャブ協会は、既に、1865年、東洋語学校を設立、1866年にはカレッジのクラスまで開設するに至っていたが、1867年に、学校が、1868年には、カレッジのクラスが閉鎖されてしまっていた。
- 27) 一般に、「パンジャブ協会の詩会」という言い方がされるが、これは誤解を生み易い言い方で、4月19日の会合及びその後の詩会を主催したのは、パンジャブ協会ではなく、パンジャブ州政府であった。この点に関して、アスラム・ファルキーはこう書いている。
「これらの詩会は協会とは何の関係もなかった。これらの詩会は教育局の主催で開かれており、パンジャブ協会と詩会との関係は、ただ単に、詩会が協会の建物で開かれ、協会の雑誌に詩会の議事録が掲載されたという程度のことである。単にこれだけの理由で、これらの詩会をパンジャブ協会の詩会と呼ぶのは全く適当ではない。」
(Aslam Farrukhī, *Muḥammad Husain Āzād: Ḥayāt aur Taṣānīf*, Vol. 1, Karachi, 1965, pp. 294-295.)
パンジャブ協会が詩会と何の関係もなかった、と言うのは言い過ぎであろうが、パンジャブ協会が詩会を主催したのではない点には注意しておく必要がある。
- 28) Tabassum Kāshimīrī (ed.), *Naẓm-e Āzād*, Lahore, 1978, p. 207.
- 29) Ibid., p. 191.
- 30) 例えば、北西連合州。
北西連合州では、1868年、ウルドゥー語、ヒンディー語を発展させるため、コンクールを行なうと発表、これにナズィール・アフマド (Nadhīr Aḥmad) が、小説『花嫁の鏡』(Mir'at al-'Urūs)を提出して、報奨金を獲得している。
- 31) Hālī, Alṭāf Husain, *Ḥayāt-e Jāvid*, New Delhi, n.d., p. 133.
ハーリーの引用と、'Abd al-Haqq, *Sir Sayyid Aḥmad Khān: Ḥalāt-o-Afkār*, Karachi, 1975 に収録されている、インド政庁の回答の手紙のウルドゥー訳とは、かなり異なっており、英語原文との対照が必要とされるが、いずれにしても、インド政庁が、英語の絶対的優越性を唱えつつも、インドの言語に対して、好意的な態度を採るようになってきている点は疑いないところである。

- 32) Ibid., p. 133.
- 33) Tabassum Kāshimīrī (ed.), *Naẓm-e Āzād*, Lahore, 1978, p. 15.
- 34) イギリス人統治者、行政官のウルドゥー語、ウルドゥー文学の発展に果たした役割については、例えば、次のような研究書の中で触れられているが、まだまだ十分とはいえない。
Rāziyyah Nūr Muḥammad, *Urdū Zabān aur Adab meṅ Mustashīrqīn ki 'Ilmī Khidmāt ka Tahqīqī wa Tanqīdī Jā'izah*, Lahore, 1985.
- 35) Iftikhār Aḥmad Šiddiqī (ed.), *Kulliyāt-e Naẓm-e Ḥālī*, vol. 1, Lahore, 1968, p. 51.
- 36) Tabassum Kāshimīrī (ed.), *Naẓm-e Āzād*, Lahore, 1978, p. 21.
- 37) Aslam Farrukhī, op. cit., p. 234.
- 38) Aslam Farrukhī, op. cit., pp. 239–240.
- 39) これらのアーザードの講演についての詳しい検討は、稿を改めて行なうこととしたい。
- 40) ムハンマド・サーディクによれば、当時の時代精神が明瞭に姿を見せるのは、アリーガル運動に於いてである。
- 41) Aslam Farrukhī, op. cit., p. 290.
- 42) Aslam Farrukhī, op. cit., pp. 292–293.
- 43) Muḥammad Šādiq, *Āb-e Ḥayāt ki Ḥimāyat meṅ aur Dusrē Mazāmin*, Lahore, 1973, p. 107.